

谷口善太郎・執筆年表（著作目録）下

秦 重雄

一九四六年（昭和二十一年） 四十七歳

一月、日本共産党に再入党。河上肇が死去、棺を担ぐ。三月、党京都地方委員会再建会議に参加。胡麻郷農民組合を創立。胡麻郷の「鳥ヶ岳句会」を指導する。

この年から一九五七年までは、『日本労働組合評議会史』の復刊などを除いて、すべて加賀耿二の署名である。

一月二十五日、「十姉妹」（小説）を『教養』（健文社）に。

四月一日、「樹を伐る音」（随筆）を『眞日本』（大阪市・眞日本社）創刊号に。

四月一日、「浮雲過太空——河上先生をおくる——」（随筆）を『東西』創刊号に。

四月一日、「草の塚」（小説）を『東西』に連載開始（第一巻第六号（十一月二十日発行）まで五回連載。未完。）

四月一日、「蕾の梅——山宣追悼会参列記——」（随筆）を『日本輿論』（金沢市・輿論社）に。

四月十四日、「牢獄と貴族と——過去における我が国労働組合の人々」（論説）を『時論』（京都・大雅堂）に。

六月一日、「馬鈴薯」（小説）を『時論』第一巻第六号に。

六月一日、「逃亡記」（小説）を『文明』（文明社）六・七月合併号に。

七月十五日、加賀耿二著『綿』（四六判・紙装・二三九頁・十四円・装幀井澤元一）を諸作品の伏字をおこして三一書房から刊行。綿／三・一五事件挿話／踊る／幼き合唱／樹のない村、を収録。

帯に次の文章が載せられている。

本集におさめたわたしの貧しい諸作品は、もと「須井二」の筆名で発表せられたものです。いまわが民主主義革命途上の政治的自由の中で、再び陽の目を見ることの出来たのは、わたしの望外よろこびとするところです。

一九四六年七月

加賀耿二

八月十五日、「その頃の河上先生のこと―『雑草集』解説にかへて」を『雑草集 其二』（日本科学社刊）に収録。副題の「『雑草集』解説にかへて」を削除して、『つりのできぬ釣師』に収録。「加藤年譜」の『雑草集』は間違い。なお、『雑草集』（一九四六年六月二十日、大雅堂刊）には谷口善太郎の文章は見当たらない。

八月十五日、『時論』第一巻第八・九号の座談会「共產党を語る―共產党批判―」に「作家・加賀耿二」として出席。他の出席者は、末川博（立命館大学学長）、滝川幸辰（京都帝大法學部長）、恒藤恭（大阪商大学長）、名和統一（大阪商大教授）、本社編輯部員。

十二月、『句集 鳥ヶ岳』第一集を発行。現物未確認、加藤則夫「胡麻郷と晩節」（『たにぜんの文学』所収）による。“（編者注）

「加藤年譜」には、「九月、「解放は自らの手で」を『京都大学新聞』に発表。」とあるが、該当文は見当たらない。『京都大学新聞』とは一九五九年からの名称。この時期は『学園新聞』である。

一九四七年（昭和二十二年） 四十八歳

一月十五日、『句集 鳥ヶ岳』第二集を発行。編集兼発行者は加賀耿二。発行所は、京都府船井郡麻郷村字胡麻 吉竹実美方 鳥ヶ岳句会。会員は十二名。A5判・十三頁・三円。俳句六句・「余白に」（耿二）・「会員諸氏に」（耿二記）を収録。「わがペンの音に気づきぬ夜半の冬」（加賀耿二）

二月十三日、『句集 鳥ヶ岳』第三集を発行。編集兼発行者は加賀耿二。A5判・十三頁、四円。俳句二句・「俳句の歴史」・「嘘と真実」（耿二記）・「編集雑誌^{マツ}」（耿二記）を収録。「俳句の歴史」は、「大野林火編の『俳句のすゝめ』（三省堂刊）の中から、耿二が少し書き直して転載した」と「編集雑誌」にある。「陶工宇野三吾訪問 逝く年を青磁の壺と語りけり」（耿二）

三月二十日、『句集 鳥ヶ岳』第四集を発行。編集兼発行者は加賀耿二。A5判・十三頁・四円。俳句五句・「松尾芭蕉―俳句の歴史―2」（論説・耿二生）を収録。「子の紅を妻も貰ひつ雛祭」（耿二）

四月二十日、『句集 鳥ヶ岳』第五集を発行。編集兼発行者は加賀耿二。A5判・十一頁・四円。俳句の収録はなし。

四月、京都第二区より党公認として衆議院選挙に立候補、落選。“

五月十五日、『句集 鳥ヶ岳』第六集を発行。編集兼発行者は加賀耿二。A5判・九頁・定価未記載。俳句の収録はなし。

七月二十五日、『句集 鳥ヶ岳』第七集を発行。編集・発行は加賀耿二。A5判・十二頁・十円。会員三十一名・俳句三句・与謝蕪村・俳句の歴史3」（論説・耿二生）を収録。「清水（即詠） 鎌置さてまづはらばひし清水かな」（耿二）

十二月一日、「いのししの被害―京都胡麻郷開墾地現地報告」（論説）を『農政評論』に。『つりのできぬ釣師』に収録。

（編者注）

『句集 鳥ヶ岳』第二集から第十集までのコピーの入手については伊藤哲英氏のお手を煩わした。お名前を記して感謝の意を表します。なお、伊藤哲英「資料 谷善と俳句 句誌『鳥ヶ岳』 胡麻郷鳥ヶ岳句会」（『谷善と現代』第二号、二〇一八年六月八日、谷口善太郎を語る会発行）によって、『句集 鳥ヶ岳』の詳細が、集ごとに初めて紹介された。

一九四八年（昭和二十三年） 四十九歳

三月十五日、「待月昇―その頃の先生のこと―」を『回想の河上肇』（世界評論社刊）に。

八月二十五日、『日本労働組合評議会史』上巻を谷口善太郎の名前で高桐書院から刊行。

十二月二十日、加賀耿二著『清水焼風景』（四六判・紙装・二

谷口善太郎・執筆年表（著作目録）下

七〇頁・一五〇円）を郷土書房（東京都千代田区）から刊行。清水焼風景／あとがき、を収録。

十二月三十日、「座談 民主主義文学の課題」（『文華』第三十六号）に「作家 加賀耿二」として出席。出席者は他に岩上順一・宮川実・森山啓。『文華』は石川文化懇話会が編集、北国新聞社刊。

十二月二十日、『日本労働組合評議会史』下巻を谷口善太郎の名前で高桐書院から刊行。

（編者注）

「待月昇―その頃の先生のこと―」の末尾に、「附記 本稿は先生の詩歌集『第二雑草集』のあとがきとして執筆したものである。多忙にて新稿の出来なかつたことを本書編輯社及び読者諸氏におわびいたします。加賀生」とある。

一九四九年（昭和二十四年） 五十歳

一月、京都第一区より衆議院選挙に立候補、初当選。日本共産党は四議席から三十五議席にと大躍進した。

二月二十八日、『句集 鳥ヶ岳』第八集を発行。編集兼発行者は加賀耿二。A5判・十五頁・二十円。俳句八句を収録。「柿一つ供えて吾子を忍びけり」（耿二）

四月一日、「議員に選ばれて」（随筆・谷口善太郎（加賀耿

二二)を『新日本文学』に。”

四月五日、『句集 鳥ヶ岳』第九号^マを発行。編集兼発行者は加賀耿二。A5判・十三頁・十五円。俳句六句を収録。「春泥や茶碗わりたる日もありき」(耿二)

五月一日、「大正九年の頃」(「メーデーに思う」欄・随筆・谷口善太郎)を『労働評論』(毎日新聞内労働協会)に。「メーデー昔話」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。

五月五日、『句集 鳥ヶ岳』第十号^マを発行。編集兼発行者は加賀耿二。A5判・十三頁・十五円。俳句の収録はなし。「〇加賀耿二氏 何れ帰郷の予定と承っていますが今回都合で左記へ転居されました。京都へ来られたら是非寄ってくださいとのこと。京都市左京区一乗寺染殿町二二」と「消息」欄にある。

六月一日、「追いつめられた地方自治体」(論説・谷口善太郎)を『新しい世界』(日本共産党出版部発行)に。

一九五〇年(昭和二十五年) 五十一歳

“蜷川虎三を説得して知事選への出馬を決意させた。”

一月一日、「国会―第十五控室―」第一部(小説・加賀耿二 まつやまふみお画)を『真相 特集版』第十五集(編者注・「つづく」とあるがこの号のみ)に。

二月一日、『改造文芸』の座談会「共産党首脳 文学者と語る」

に谷口善太郎で出席。出席者は他に共産党側からは野坂参三、大村英之助(共産党文化部長)、文学者側からは宇野浩二、豊島与志雄、石川達三、司会は高田保。

六月、党中央委員公職追放の後を受けて党臨時中央指導部員となる。朝鮮戦争勃発と同時にマッカーサーによつて公職追放される。“

十月十五日、「(一九三一年四月作―一九五〇年七月訂正)」と末尾に記した加賀耿二作「綿」を収録した『現代日本小説大系 第四十一巻 プロレタリア文学2』(解説中野重治)を河出書房が刊行。

(編者注)

『政治と文学』三号(一九八二年八月十五日、政治と文学の会発行)掲載の草野信男「須井一」「綿」について 附、谷口善太郎著作目録・略年譜」は左記の意見を述べている。

一九五〇年の谷口善太郎の位置は今少し複雑である。(中略)当時、日本共産党の中央幹部に登用された著者は、所謂日本共産党の五〇問題といわれる党の分裂に際し所感派に属していたが、活動を展開する矢先に不当にも公職追放に附され、職業革命家として政治活動に従事することを禁ぜられたのである。もつとも、谷口自身は可能な限りでの非公然活動に従事していたといっているが、地下に潜行していない以

上、それは著しく制約されたものであつたろう。そういうことから思わぬ時間的余裕をもった作者は再び文学の世界に帰る動きを示すのである。そして手始めに旧作「綿」大幅改訂の筆を執ったほか短篇の創作なども試みる。

谷口善太郎が忠誠を誓っていた党（所感派）は、この時期、民主陣営内の分裂主義者として立ち現れていたが、民主主義文学運動の分野にも分裂主義を持ち込み、己れの党派に従属する文学グループとして『人民文学』を創刊、育成した。五一年から五二年にかけて二度にわたりその『人民文学』に短篇を発表している谷口は、旧作「綿」を党（所感派）の文芸路線を反映する作品に仕立直すことを思いついたようにみえる。（中略）党（所感派）が当面の戦略課題を民族解放においていたところから文学作品においても階級性より民族性を重視するという民族主義的偏向を露（あらわ）にしていた。（中略）谷口善太郎も旧作「綿」に大幅の改訂を施すことにより日本プロレタリア文学史上の佳作を党（所感派）の文芸路線にそう作品として再生させ、そのことによって党（所感派）に対する自身の忠誠の証しをたてようとしたものとみられる。即ち、漢字の大幅な平仮名化はひたすら平易化の追求であり、会話における方言の徹底は階級性を犠牲しても民族性を際立たせようとする志向の現れである。（中略）一九五〇年七月の改訂は「訂正」ではなく「改悪」ではないだろうか。むしろ、いうならば一九五〇年代におけ

る作者の政治的・思想的誤謬の産物が「綿」新訂版なのだ。（中略）著者が既に亡い今日、「綿」のどの版を決定版とするかは出版社編集部なり解説者の見識に俟つしかないと思われるが、事情がそのようであれば「綿」解説者はせめて一九五〇年七月の著者による大幅改訂の事情ぐらいはその「解説」においてふれるべきであらう。

一九五一年（昭和二十六年） 五十二歳
“六月一日、「道づれ」（小説・加賀耿二）を『人民文学』を発表。”

六月（日付なし）、中国語訳の、“日本 須井一著『棉花』（胡風訳、縦十七センチ・横十二センチ・紙装・八七頁・定価四〇〇〇）”が上海・泥土社から刊行される。序／棉花、を収録。

八月一日、「名作連載 綿」（加賀耿二作 編集部（篇）第一回）を『新女性』に。（编者注・「編集部では作者の了解を得て、約半分に要約し二回にわたつて連載することにしました。」とある。）

九月一日、「名作連載 綿」（完結篇）を『新女性』に。

一九五二年（昭和二十七年） 五十三歳
二月一日、「犬と泥棒」（小説・加賀耿二）を『人民文学』に。“

二月四日、「解放戦の苦斗描く」（書評・加賀耿二）を『学園新聞』に。

二月（日付なし）、加賀耿二「綿」を収録した『小説集 日本人労働者』（小四六判・紙装・一八九頁・七、〇〇〇圓）が中国・民主新聞社から刊行される。

三月（日付なし）、加賀耿二「犬と泥棒」が『前進』第二十六号に再録される。

九月一日、「総選挙にあたって 部落問題をこう考える」（アンケート回答）を『部落』（部落問題研究所発行）に。

（編者注）

「解放戦の苦斗描く」は『白樺天皇行状記—呂梁英雄伝 正篇』

（馬烽・西戎著、三好一訳、一九五一年十二月三十日、三一書房

〈京都市左京区〉刊）の書評。

『前進』は中国・瀋陽市和平区民主路四九号・民主新聞社発行の日本語雑誌。

『小説集 日本人労働者』も同じ民主新聞社から刊行されている。収録作品は、春川鐵男「日本人労働者（第二部）」加賀耿二「綿」／松田解子「地底の人々」の三作。「綿」は「新女性編集部編」とある。前年の『新女性』掲載の「綿」がそのまま収録されている。

一九五三年（昭和二十八年） 五十四歳

十二月十五日、谷口善太郎著『日本労働組合評議会史』上（青木文庫）を青木書店から刊行。「青木文庫版へのあとがき」を収録。

一九五四年（昭和二十九年） 五十五歳

二月一日、谷口善太郎著『日本労働組合評議会史』下（青木文庫）を刊行。

四月一日、「階級戦士としての同志山本宣治」（随筆・谷口善太郎）を『前衛』に。『社会問題研究』一九二九年九月の同名の掲載文に「はしがき」と「注」を追加したもの。『つりので きぬ釣師』に収録。

十二月二十五日、加賀耿二『清水焼風景』（日本プロレタリア長篇小説集5 四六判・厚紙装・カバー・帯・二二〇頁・二〇〇円）を三一書房から刊行。清水焼風景／恐慌以後／解説にかえて〈加賀耿二／「加賀耿二年譜」を収録。〉

（編者注）

『清水焼風景』（日本プロレタリア長篇小説集5）所収の「恐慌以後」は、末尾に、（一九三三年五月改作）と記している（二〇五頁）。なお、帯文は左記の通り。

「清水焼風景」は一九三二年夏に書きあげられ、同年十月

改造社から出版されたが、すぐ発禁となった。これは京都の陶器労働者の闘争を描いたものである。「恐慌以後」は一九三一年秋に書かれ、一九三三年一月号の「プロレタリア文学」に連載されたもの。前作「綿」の続篇ともいうべきものである。

以下出て来る掲載紙誌について注記しておく。『前衛』『アカハタ』（後に『赤旗』）『赤旗日曜版』『月刊学習』『議会と共産党』（後に『議会と自治体』『学生新聞』『読書の友』は日本共産党発行の定期刊行物である。『京都民報』は京都民報社発行の地方政治新聞。『民主青年新聞』は日本民主青年同盟中央機関紙。『解放旗』は日本民主青年同盟京都府委員会機関紙（後に『京都青年』）である。

図書館・文学館で閲覧出来ず、また、古書でも入手できなかった、日本共産党発行の定期刊行物掲載の三文献について、日本共産党中央委員会資料室の鈴木裕子さまのお手を煩わせた。お名前を記して感謝の意を表します。

一九五五年（昭和三十年） 五十六歳

五月三十日、加賀耿二「綿」を収録した『日本プロレタリア文学大系 第五巻』を三一書房が刊行（「解説」は小田切秀雄）。

六月一日、『大乘』の「対談 労働者と宗教 人間観」（鼎談 谷口善太郎・前芝確三・安部大悟）に出席。
六月十二日、「戦前の労働学校の思い出」（随筆・谷口善太郎）を『学習の手引き ともしび』（京都勤労者教育協会発行）に。

八月十日、加賀耿二「綿」を収録した『現代日本小説大系』第四十三巻（解説中野重治）が刊行される。一九五〇年刊の『現代日本小説大系 第四十一巻 プロレタリア文学2』と内容は同じ。

八月十日、『プロレタリア文学』（日本文学アルバム13、筑摩書房刊）に、「傑作「綿」を『ナッパ』に発表した須井一（谷口善太郎）」の顔写真が掲載される（四十八頁）。帽子、眼鏡、背広、ネクタイ姿。（編者注）病臥中だった須井一の時期ではない。

一九五六年（昭和三十一年） 五十七歳

十一月三十日、「大山先生と新労農党」（随筆・谷口善太郎）を収録した『大山先生の思い出』（大山郁夫伝附録）を中央公論社から刊行。（一九五五年十二月十八日、同志社大学における大山郁夫追悼懇談会での挨拶の速記）とある。

一九五七年（昭和三十二年） 五十八歳

五月五日、須井一「綿」を収録した『現代日本文学全集86 昭和小説集（二）』（筑摩書房）が刊行される。綿／年譜／解説（臼井吉見）を収録。

七月十五日、「労働者・源三 須井一（加賀耿二）」（編者注・第一部）を収録した小田切秀雄編『続発禁作品集』（北辰堂）が刊行される。

（編者注）「解説」（小田切秀雄）には、「いま作者の手もとに禁止部分の校正刷が保存されていたので、こんどはじめて伏字なしで発表されるわけである。」（二四六頁）とある。

十一月三十日、加賀耿二「清水焼風景 抄」（編者注・第八章の一部）を収録した『日本プロレタリア文学大系 第六巻』（三一書房）が刊行される。

以降の署名は「谷口善太郎」。「加藤年譜」に掲載されていないが、「つりのできぬ釣師」に収録されているものは初出が末尾に記されているので□で囲まず、〃扱いとした。

一九五八年（昭和三十三年） 五十九歳

一月二十七日、「闘争が然らずんば死か」の心境 入党の頃の河上先生」（随筆）を『学園新聞』に。

一九五九年（昭和三十四年） 六十歳

四月二十七日、アンケート回答を『京都旧友クラブ会報』第二十一号に。

一九六〇年（昭和三十五年） 六十一歳

十一月、京都第一区より衆議院選挙に立候補、当選。追放後、十年目に議席を奪還。

一九六一年（昭和三十六年） 六十二歳

二月一日、「社会主義的人間―訪ソ日記から―」（随筆）を『学習の友』（労働者教育協会発行）に。

三月一日、「三・一五事件のころ」（随筆）を『前衛』に。

十月十五日、十一月一日、十一月十一日、「訪ソだより①②③」（随筆）を『京都市報』に。

十月二十日、「公園で」（随筆）を『小説中央公論』第六号「随筆風掌品」欄に。『つりのできぬ釣師』に収録。

十月一日、「臨時国会の焦点とわが党の任務」（論説）を『議会と共産党』に。

十一月一日、『議会と共産党』の「編集印刷発行人」となる。前任者は岩間正男。

一九六二年（昭和三十七年） 六十三歳

一月一日、「年頭にあたつて」（挨拶文）を『京都民報』に。
一月一日、「議会と自治体」誌に改題するにあつて」（挨拶文）、「独占に奉仕する人権無視の郵政」特別考査」（衆議院通信委員会での質疑応答）「談話 補正予算に反対する」を『議会と共産党』に。

四月一日、「誠実にけんきょに率直に訴えよう——実践的選挙活動について——」（活動者会議での発言）を『議会と自治体』に。

六月一日、「党の基本方針を堅持しよいよ参議院選挙に突入しよう」（論説）を『議会と自治体』に。

六月十一日、「第十六回河上祭を迎えて」（随筆）を『京都民報』に。

七月十一日、七月二十一日、「党創立当時の思い出」①②（随筆）を『京都民報』に。

七月十二日、「国領伍一郎（一九〇二年—一九四三年）」（談話・党をききういた人びと 創立四十周年を記念して②）欄）を『アカハタ』に。『語る人』日本共産党中央委員谷口善太郎」とある。

十月五日、「国領伍一郎」（随筆）を収録した『党をききういた人びと』（日本共産党中央委員会出版部）が刊行される。七月十二日付『アカハタ』掲載文と同じ。『つりのできぬ釣師』に

収録。

十一月一日、「教育・文化交流」の美名にかくれ日本の学者をヒモつき研究に動員」「米軍事戦略に利用される太平洋横断ケープル」「国會議員互助年金法のお手盛り改悪に反対」（＊三点とも衆議院での委員会発言。「第四一国会で奮闘する日本共産党国会議員団」欄）を『議会と自治体』に。

一九六三年（昭和三十八年） 六十四歳
十一月、京都第一区の衆議院選挙でトップで当選。”

一月一日、「年頭にあたつて 今年も頑張ろう」（挨拶文）を『京都民報』に。

一月一日、「国領伍一郎同志の思い出」（随筆）を『月刊学習』に。

三月十五日、「一枚の写真による思い出」（随筆）を収録した『一九六三年三月没後二十周年記念 国領伍一郎』が日本共産党京都府委員会から刊行される。

“四月一日、「綿」をかいたころ」（随筆）を『新しい人』（京都民主主義文学会発行）に。

五月一日、「私の学校」（随筆）を『民主青年新聞』（未見）に。『つりのできぬ釣師』に収録。”

七月七日、「党創立当時の思い出」(随筆)を『新しい人』に。

八月一日、「教科書を事実上国定化するもの―教科書無償法案に反対する―」(国会での質疑と討論・谷口善太郎)を『議会と自治体』に。

十月(日付なし)、「第二の故郷・日吉町」(随筆)を『日吉陶業誌』に。

十二月二十日、『谷口善太郎小説選』(四六判・紙装・カバー・二六六頁・三四〇円)を新日本出版社から刊行。三・一五事件挿話／綿／踊る／幼き合唱／庄五郎おやじ／銃殺／再生記／雪の夜の話／少年／美しき自然／土地はだれのものか、を収録。解説は津田孝。

十二月二十二日、「党躍進祝賀大会で」(「思うまま」欄・随筆)を『アカハタ日曜版』に。「党躍進祝賀会で」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。

(編者注)

『谷口善太郎小説選』収録の「綿」は、末尾に「(昭和六年八月―九月「ナツプ」)(昭和二十五年七月訂正)とある。一九五〇年一〇月刊行の『現代日本小説大系 第四十一巻 プロレタリア文学2』版の「綿」が収録されている。以降、「綿」の収録はこれによる。

「土地はだれのものか」は末尾に「(一九四〇年「中央公論」三

月号)」とあるが、初出題名は「立札」である。

前掲・草野信男論文は、「綿」の一九五〇年の改訂に続いて、この「土地はだれのものか」も「改題」だけではなく、「改訂」されている、と指摘している。

「結末」「しめくくり」の二行百八十六字こそ他でもない一九六三年改訂の時、作者によってあらたに付け加えられた部分なのであり、初出にはその二行はなかったのである！

一九六四年(昭和三十九年) 六十五歳

一月一日、「党指導と思想動員 堅実な態度で大衆を結集」(論説)(〈特集 勝利と前進の意義をかみしめて―当選のよることびと決意)欄)を『議会と自治体』に。

二月三日、「新春放談 テレビを買う」(随筆)を『アカハタ』に。「テレビを買う」に改題して『つりのできぬ釣師』に収録。

一月九日、「おまもり」(随想「欄・随筆」)を『アカハタ』に。

「お守り」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。

三月一日、「年末年始」(随筆)を『文芸春秋』に。『つりのできぬ釣師』に収録。

三月十五日、谷口善太郎「階級戦士としての同志山本宣治」を収録した田村敬男編『山本宣治―白色テロは生きている―』

が室賀書店（大阪市生野区）から刊行される。「前衛」に発表されたものを谷口同志の諒解を得て本書に採録したものである。編者」とある。

四月三十日、「綿」（谷口善太郎）を収録した『日本プロレタリア小説集Ⅱ』（解題・小林茂夫）が新日本出版社から刊行される。

“七月十日、「河上肇と共産党―第一回配本『自叙伝上』について―」（随筆）を『読書の友』に。「河上肇と共産党」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。”

九月二十五日、「労働災害防止に関する法律案」に反対する」（一九六四年六月九日衆議院社会労働委員会での谷口善太郎議員の反対討論）を収録したパンフレット『第46国会―日本共産党のたたかい―』（日本共産党中央委員会宣伝教育文化部発行。八六頁・五十円）が刊行された。（編者注・労働災害の防止対策を資本家団体の自主的活動に一任しようとしているので反対する。」と述べている。）

“九月（日付なし）、「河上先生の「血みどろ」の「書」」（随筆）を『河上肇著作集月報4第8巻付録』に。『つりのできぬ釣師』に収録。”

一九六五年（昭和四十年） 六十六歳

一月一日、「一九六五年を勝利の年に」（挨拶文）を『京都市報』に。

一九六六年（昭和四十一年） 六十七歳

一月一日、「年頭書簡」（挨拶文）を『解放旗』に。
一月五日、「年頭所感 人民の輝かしい前進の年に」（挨拶文）を『京都市報』に。

“二月二十九日、「河上肇先生の思い出―没後二十周年によせて―」（随筆）を『アカハタ』に。副題を省略し、「河上先生の思い出」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。”

四月一日、「政府自民党のたくらむ小選挙区制の陰謀を糾弾する」（国会での質疑と政府答弁・谷口善太郎）を『議会と自治体』に。

七月十三日、「党京都支部の確立」（随筆）を『京都市報』に。

“八月八日、「石川啄木 一握の砂」（子供によませたいこの一冊18」欄・随筆）を『読書の友』に。「子供によませたい」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。”

九月二十五日、「不屈の闘士、梨木作次郎」（随筆）を収録している『貧農に生まれて―梨木作次郎の歩んだ道』が梨木会から刊行。

“十一月（日付なし）、パンフレット『写真集 日本共産党代議士 谷口善太郎の歩んだ道』（A5判・紙装・十二頁・三十円）を京都市民報社から刊行。”

一九六七年（昭和四十二年） 六十八歳

“二月、京都第一区の衆議院選挙で当選。”

一月一日、「共産党の躍進で報道機関の反動化をはばもう」〔今年の抱負〕欄。挨拶文を『赤旗』に。

一月一日、「年頭あいさつ（＊無題）」を『京都市民報』に。

二月一日、「選挙十句」（俳句）を『赤旗』に。

“七月二日、「獄中の河上博士励ます 真理と革命まもる夫人の愛」（河上秀著『留守日記』―冬の時代に耐えた妻の記録―）の書評」を『赤旗日曜版』に。「河上夫人の愛―留守日記」をよむ」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。”

七月十九日、「京都が生んだ我々の指導者―党創立四五周年を記念して」（随筆）を『京都市民報』に。

“十月二十三日、『随想』わが学習の思い出『共産党宣言』か

ら『資本論』へ 思いだす研究会の国領佐一郎同志のこと」（随筆）を『読書の友』に。長い副題を削除し、「わが学習の思い出」として、『つりのできぬ釣師』に収録。”

ハンガリー語版の『近代日本の物語』（一九六七年（月日なし）、四六判・布装・五七五頁）をブダペスト所在のヨーロッパ出版社が刊行。谷口善太郎（須井一）「綿」を収録。

一九六八年（昭和四十三年） 六十九歳

一月一日、「日本共産党と統一戦線の飛躍の年に」（挨拶文）を『京都市民報』で。

二月一日、「法案審議にかんする党国会議員団の態度―第五五、五六国会における法案審査について」（論説）を『前衛』に。

“九月十五日、「川上同志の死をいたむ」（随筆）を『赤旗』に。「川上貫一同志の死を悼む」と改題し、引用の詩の注を削除して、『つりのできぬ釣師』に収録。

十一月一日、「川上貫一同志を憶う」（随筆）を『議会と自治体』に。「川上貫一同志」と改題して、『つりのできぬ釣師』に収録。“同誌には、「ハンセン氏病患者の待遇改善について―日用品増額などを認めさせる―八月二十七日衆院社会労働委員会」（国会での質疑と政府答弁・谷口善太郎）も掲載されている。

一九六九年（昭和四十四年） 七十歳

二月一日、「百里を行く決意（挨拶文）」を『京都民報』に。
『つりのできぬ釣師』に収録。

一月一日、「いかなる事態にも即応しうる態勢に」（挨拶文）を『京都青年』に。

二月三日、「つりのできぬ釣師」（「随想」欄・随筆）を『赤旗』に。
『つりのできぬ釣師』に収録。

一月十九日、須井一「綿」を収録した『日本現代文学全集・講談社版69 プロレタリア文学集』が刊行される。

二月二十二日、「しらみ退治」（「随想」欄・随筆）を『学生新聞』に。
『つりのできぬ釣師』に収録。

二月二十五日、谷口善太郎「綿」を収録した『日本プロレタリア文学選2』（囃入・解題は小林茂夫）が新日本出版社から刊行される。

三月一日、「山本宣治同志の思い出―死後四十周年を記念して―」（「随想」欄・随筆）を『文化評論』に。

五月一日、パンフレット『七〇年への道』（小四六判・紙装・四八頁・三〇円）を京都市民報社から刊行。

六月十三日、「愛知外相訪米問題」で「発言」。『つりのできぬ釣師』には収録されているが『赤旗』該当号には掲載されていない。緊急質問をメモしたものと思われる。

九月一日、「戦後最悪の佐藤内閣は退陣せよ。」「健康保険抜本的改悪に反対する」（編者注・二編とも『赤旗』からの再録）を『議会と自治体』に。

九月十二日、「川上貫一同志の一周忌を迎えて」（随筆）を『赤旗』に。「一周忌を迎えて」に改題して『つりのできぬ釣師』に収録。

十二月七日、「『不封己』（おのれをあつうせず） 杜甫」（わたしの好きなことば）欄・随筆）を『赤旗 日曜版』に。「好きなことば」に改題して『つりのできぬ釣師』に収録。

二月、京都第一区から衆議院選挙に立候補、トップ当選。

（編者注）

『七〇年への道』の内容は左記のとおり。

自筆短冊／序（著者／すいせんの言葉（野坂参三、河田賢治、蜷川虎三）／七〇年への道（貧農に生まれて／党の戦列へ／大弾圧／暗黒時代／敗戦と党再建（一九六九年四月）／国会質問／略歴、編集後記

『七〇年への道』は、「わが経歴」と改題して『つりのできぬ釣師』に収録。

一九七〇年（昭和四十五年） 七十一歳

五月十五日、「公明党よ、出版妨害の事実を認めよ 日本共産党衆議院議員 谷口善太郎」、「植村左内参考人に対する谷口善太郎議員の質問」、「第63回国会・予算委員会議録 共産党・谷口善太郎質問」を収録した『私は証言する！ 出版妨害問題 真相究明国会議員集会の全記録』（日新報道出版部編集）が日新報道から刊行される。

七月二日、日本共産党第十一回大会で「国会議員団の闘争における二つの教訓」を発言。（『前衛』同年九月臨時増刊号（九月十五日発行）に収録。

八月一〇日、「衆院予算委員会における発言の不当差別に反対する（二・一六）」（談話・谷口善太郎）を『議会と自治体』臨時増刊号に。

“十一月四日、五日、六日、八日、「怒りに燃える島」（随筆）を『赤旗』に。『つりのできぬ釣師』に収録。”

一九七一年（昭和四十六年） 七十二歳

五月二十六日、『狐のくれた赤ん坊』（主演・勝新太郎）封切（編者注） 石子順「庶民と武士との対比 「狐のくれた赤ん坊」（大映）」（『赤旗』一九七一年六月十日付、「映画」欄）で、「原作・脚色」丸根賛太郎、監督「三隅研次ですが、もう一人

の原作者谷口善太郎の名前がおちているのはどういうわけでしょうか。」と指摘されている。同年六月十三日付『赤旗』掲載の、丸根賛太郎「『狐のくれた赤ん坊』と谷口善太郎氏」がその疑問に答えている。

“七月二十四日、「任務に命をかける山本宣治のたたかい」（歴史のひとこま⑨）欄、随筆）を『赤旗』に。『つりのできぬ釣師』に収録。”

一九七二年（昭和四十七年） 七十三歳

一月一日、女優南風洋子との新春対談に出席（『京都民報』）。四月九日、四月十六日、四月二十三日、「河上肇 日本共産党創立五十周年 礎をきずいた人びと」（随筆）を『京都民報』に。

“四月十日、『つりのできぬ釣師』（四六判・厚紙装・函入・帯・三二五頁・六八〇円・装幀まつやまふみお）を新日本出版社から刊行。”

六月十一日、壽岳文章との対談「河上肇博士の思い出」に出席（『京都民報』）。

七月六日、座談会「不屈の五〇年、戦前の党活動を語る」に在京都戦前派遣運動家十二氏と」に出席（『京都民報』）。

七月十五日、「河上肇（谷口善太郎）」（随筆）を収録した

『日本共産党創立五十周年 礎をきずいた人びと』が京都市民報社から刊行される。

七月十五日、『綿 谷口善太郎小説選』（四六判・厚紙装・カバー・二五六頁・六〇〇円・装幀小野忠重）を新日本出版社から刊行。三・一五事件挿話／綿／踊る／幼き合唱／庄五郎おやじ／銃殺／再生記／雪の夜の話／少年／美しき自然／土地はだれのものか、を収録。一九六三年刊の『谷口善太郎小説選』と収録作品は同じ。解説はなし。

八月五日、「戦前の労働者教育あれこれ―評議会の労働者教育―」（談話）を『月刊学習運動』（労働者教育協会編集、学習の友社発行）に。「憲法とたたかいのblog」で初めて紹介された。ただし、「（総同盟と評議会の労働者教育）」と副題を改題している。

十月二十五日、後援会部内資料『たにぜん』（河田賢治・小笠原貞子編集・縦十九センチ・横二十センチ・紙装・二十四頁・五十円）を京都市民報社から刊行。

十二月、京都第一区から梅田勝とともに衆議院選挙に立候補（一区複数立候補は善太郎の提起による）。二名とも当選、自らもトップで当選。

（編者注）

『つりのできぬ釣師』は見返しに「（随筆と小品）」と記されて

いる。収録作品は左記のとおり。

口絵写真（そと夫人と）

わが経歴（貧農に生まれて／党の戦列へ／大弾圧／暗黒時代／敗戦と党再建）

戦後雑草（蕎麦をまく／メーデー昔話／いのししの被害／公園で／私の学校／党躍進祝賀会で／テレビを買う／お守り／年末年始／子供によませたい／好きなことば／わが学習の思い出／つりのできぬ釣師／百里を行く決意／しらみ退治／発言／怒りに燃える島）

思い出の人びと 国領五一郎 山本宣治（階級戦士としての同志山本宣治／任務に命をかける山本宣治のたたかい） 河上肇（その頃の河上先生のこと／河上肇と共産党／河上先生の「血みどろ」の「書」／河上先生の思い出／河上夫人の愛） 川上貫一（川上貫一同志の死をいたむ／川上貫一同志／一周忌を迎えて） 小品拾遺（バットの箱／お千代／行軍／夕しぐれ／参宮列車で／夏の宵／荷を挽く馬／あの頃の日記／家鴨の子たち／清水のあたり／山蘭／柿の話／春の彼岸／枝から枝へ／道づれ）

あとがき

『たにぜん』の内容は左記のとおり。

京都に住んで五十年／座談会 いま新しい歴史の開くとき 谷善さんおおいに語る／政治の革新で新しい日本を 日本共産党の政策のあらまし／京都の住民の利益を守って 真つ向から対決 大ボラ列島改造論と／えがたい人（不破哲三）／善さん半代記／

小説 鉄 須井一作 横重吉画／小説家・谷口善太郎（住谷悦

治）／必勝を訴える（安井真造）／たにぜんさんのひとがら（野坂

参三・河田賢治・蜷川虎三・船橋求己）／谷口善太郎さんに期待

します（四十氏）／よびかけ（谷口善太郎後援会）／谷口善太郎

著書（裏表紙）

一九七三年（昭和四十八年） 七十四歳

〃四月三日、『キリスト新聞』主筆の武藤富男と対談。『キリスト新聞』「武藤本紙主筆 日本共産党に聞く」四月十四日、四月二十一日、四月二十八日、五月五日、五月十二日、五月十九日、計六回連載。

七月十二日、『日本共産党に聞く』『キリスト新聞』時事問題パンフレット』（小四六判・紙装・三〇頁・百円）がキリスト新聞社から刊行される。前記の武藤富男との対談をパンフレットにしたものである。没後、蔵原惟人編『宗教と共産主義についての対話』（一九七六年一月三十日、新日本出版社刊）に「キリスト者（プロテスタント）との対話」（Ⅱ 宗教者と共産党員との対話）の「二」）として収録。

十一月十一日、「フィルムで多喜二に再会」（随筆）「映画『小林多喜二の成功を』欄、を『京都民報』に。末尾に（東京・議員宿舎にて）とある。

〃十二月、代々木病院に入院中、塩田庄兵衛と「『日本労働組合

評議会史』について」対談。

一九七四年（昭和四十九年）

〃三月、京都府知事選で蜷川虎三応援のため帰洛。四月、慶応病院に入院。（中略）六月八日午前五時五十分にて永眠した。

七月二十日、詩「妻よ」が「友人代表 参議院議員 須藤五郎」の作曲で、「故谷口善太郎氏追悼式」（日本共産党京都府委員会主催）の会場の勤労会館で紹介される。（『京都民報』一九七四年七月二十八日付。）

（編者注）

須藤五郎の「追悼のことば」の一部を左記に記す。

善さん。一九六九年の総選挙の中で「生まれてはじめて作った詩だ」といって「妻よ」と題する一篇の詩を示された時、一見して僕は老闘士善さんの面目躍如たるものに心うたれ即座に紙片に五本の線を引き楽譜を書きとめました。生前ゆっくり歌ってきいてもらうこともなく終わってしまったその曲をあらためて君に捧げる。

「一九七〇・二・五作曲」とある「妻よ」の歌詞は左記のとおり。

きみもぼくも

ずいぶんしわをたくわえたが
まだやすむわけにはいかないぞ
そらはくらくてあらしもつよい
さあしつかりたづなをさばけ
おれはかじをはなさない
りくはちかいのだ

（没後刊行）

一九七五年四月二十五日、谷口善太郎著『綿』（新日本文庫
二三〇頁・三一〇円・カバー 絵・吉井忠 表紙・扉・装丁・秋
元道男）を新日本出版社から刊行。綿／踊る／幼き合唱／土地は
だれのものか、を収録。解説・小林茂夫。

一九七五年二月二十五日、谷口善太郎著『日本労働組合評議会
史』（A5判・クロス装・函入・四〇四頁・三五〇〇円）を新日
本出版社から刊行。

巻頭の塩田庄兵衛「新版（第四版）序文」に、「これまでの各
版は、いずれも上・下二巻にわかれていたが、第四版にあたるこ
の新日本出版社版では、これを一卷にまとめ、著者に本書につい
ての思い出や最近時点での感想を語ってもらった「解説のための
対談」を巻末に新しく収録した。」「本年は、一九二五年五月に結
成された日本労働組合評議会の五十周年に当たる。」とある。

一九七六年八月二十日、須井一「綿」を収録した『土とふるさ
との文学全集 10 理想と抵抗』が社団法人家の光社から刊行さ

れる。解説は久保田正文。

一九八五年三月二十五日、「掌編・壁小説集」として「元日」
「庄五郎おやじ」「銃殺」を収録した『日本プロレタリア文学集20
「戦旗」「ナツプ」作家集』が新日本出版社から刊行される。解説
は佐藤静夫。

一九八六年十一月三十日、『日本プロレタリア文学集29 谷口
善太郎集』（四六判・クロス装・函入・帯・四五〇頁・二八〇〇
円）が新日本出版社から刊行される。三・一五事件挿話／綿／踊
る／幼き合唱／樹のない村／鉄／恐慌以後／行軍／お千代／参宮
列車で／帰郷／土地はだれのものか／清水焼風景、を収録。解説
は伊豆利彦。

「清水焼風景」は発見された発禁本によって初版の伏字が完全
復元された。なお、発禁本は現在では国会図書館デジタルコレク
ションで見ることが出来る。

一九九四年二月十五日、「少年」を収録した『ふるさと文学館
第21巻 石川』がぎょうせいから刊行される。作品解説は上田正
行。

一九九六年三月一日、『石川近代文学全集4 深田久弥 水声
光子 島田清次郎 加賀耿二』（A5判・カバー・帯・五七三頁
・四三三〇円）が石川近代文学館から刊行される。

綿／少年／土地はだれのものか／評伝／作品解説／参考文献／年
譜、を収録。評伝以下は小林輝治が作成。

（中国語版）

一九八四年九月（日付なし）、『谷口善太郎小説選』（下立強訳・四六判・紙装・二四五頁・一・一〇元）が中国連合出版公司から刊行される。訳者前言／三・一五事件挿話／綿／踊る／幼き合唱／庄五郎おやじ／雪の夜の話／少年／美しき自然／土地はだれのものか、を収録。

（参考文献）

一九九六年四月九日、『狐の呉れた赤ん坊 日本カルト映画全集9』がワイズ出版から刊行される。「シナリオ 狐の呉れた赤ん坊 丸根賛太郎」、「狐の呉れた赤ん坊」と谷口善太郎氏」（編者注・初出題名を一部修正）を収録。

（はた・しげお 大阪府立桜塚高校）